

結 歴史を大きくつかむ

「ひょうご五国」のこれまで、これから

結 歴史を大きくつかむ Ⅰ「ひょうご五国」のこれまで、これから

一 「ひょうご五国」への昇華と「起・承・転・結」の構成

地方史―県史をどう捉えたらよいのか。これはもつとも難しい論点である。国の歴史と併走する面があるかと思えば、各地方独自に展開する面も無視しえない。とはいえ、余りに微に入り細かい記述を試みると、読み手には何のことやら分からず、書き手の自己満足に終わってしまうことが、しばしばおこる。

そこではたと気がつくことがある。かつて哲学者の鶴見俊輔つるみ しゅんすけは、「歴史は大きくつかむ」「時間軸を大きくおさえる」と言いながら、両手をいっぱい広げて、「ダイナミクスを失ってはならんのだ」と語った。この大きくつかむ精神で、『兵庫県史―この五十年の歩み』（以下、兵庫県五〇年史）をのぞくと、何やら分かってくるようなのだ。

近代一五〇年を射程距離にしているとはいえ、兵庫県五〇年史は、既に記載した時代から後の時代を語らねばならぬという制約がそもそも課せられている。続編でありながら、独自の記述を行わねばならない。この五〇年―まさに一九六七年から二〇一八年まで―を、まずどのように捉えるのか。権力者―知事の任期によって区切ることも充分に考えられる。無論、国の歴史における総理大臣の存在より以上に、県知事の存

在は、県史では欠くことのできぬ要素と考えられるかもしれない。兵庫県五〇年史の場合、何と四代の知事と四つの時代区分から成っている。知事と時代区分は同じかと言えば、そこは時代を追うごとにズレてきている。しかし時代が人を呼びよせるということもある。歴史を大きくつかむ観点から言えば、知事の個性もさることながら、共通の特性にも注目をせねばならない。

金井元彦^{かないもとひこ}、坂井時忠^{さかいときただ}、貝原俊民^{かいはらしたみ}、井戸敏三^{いどとしぞう}の知事たちは、いずれも内務省―自治省系列の官僚出身であり、前知事の時代に副知事を勤め上げていた。公選知事でありながら、内務行政を熟知し副知事を歴任するというキャリア・パスが兵庫県においてはこの五〇年確立された―もつとも五〇年を過ぎたところで、この慣例は崩れたのだが―。兵庫県知事の継続性と安定性は確かにこの五〇年間の兵庫県の歴史を担保するものであったと言える。すなわち確固とした国の内務行政のあり方を、兵庫という地に移し替えながら、兵庫という県の特性を生かしつつ、踏襲していった側面を指摘しておこう。

それこそが、兵庫県五〇年史を貫く、鶴見俊輔流の「歴史を大きくつかまえる」視点につながっていく。兵庫県内の各々の地域は、実は早くから相互にその様相が異なっていた。違っていてあたりまえなのだが、どうも兵庫県の場合、異なるあり方を分断と相異として理解するのではなく、「地域特性」や「多様性」として積極的に尊重して、全体のまとまりを考える方向性を宿していたと考えられる。それは、兵庫県がこの五〇年の中で、県の長期計画や未来像をまとめるたびに、過去のあり方を現在の視点でとらえ直し、本来はかくあるべしとの構想として描き出すプロセスをくり返すたびに、より明快な形をとり、本来の兵庫県像をはっきりとしたことばで語れるようになっていったことに伺える。

そう、それは「ひょうご五国」ということばに明確に現れるのだ。それは、二〇一五年の「兵庫県地域創生戦略」において、はつきりとうたわれている。拾い読みをするだけでも、わかるであろう。

二〇六〇年の兵庫の姿について、「二地域居住など県内での交流が進み、国内外からの来訪者があふれる兵庫」という項目の中に、次のように書かれている。

〔五国ならではのオンリーワンの魅力が国内外の人々を呼び込む〕五国の自然、文化、伝統工芸、食等の「ひょうごオンリーワン資源」を活かしたツーリズム、健康やものづくりなど地域に根ざした産業と結びついたツーリズムなど、兵庫ならではのツーリズムが展開されて国内外から人々が訪れ、兵庫を体感している。

また、「世界経済をリードする基幹産業と地域に根ざした地域産業が県内全域で展開される兵庫」という項目では、「ひょうご五国の多様な地域特性と大消費地に近接する優位性を活かして、農業経営体の規模拡大が進み、安定した産業として多くの就農者が働いている」と記されている。

実は「ひょうご五国」との表現は、兵庫県五〇年史の時代区分のあり方とも密接に関係している。あえて言おう。兵庫五〇年の四つの時代区分は、高度成長の時代から災後の時代までを、歴史を大きくつかむ視点から言うならば、次のようなダイナミクスで捉えることができる。すなわち、「起・承・転・結」から成る構成方法にぴたりと適合するのだ。

〔起〕の編 高度経済成長とひずみ（一九六七年—一九七九年）

〔承〕の編 経済優先から生活文化重視へ（一九八〇年—一九九四年）

〔転〕の編 阪神・淡路大震災と創造的復興（一九九五年—二〇〇五年）

「結」の編 二一世紀兵庫、災後の時代（二〇〇六年―二〇一八年）

この「起・承・転・結」から成る兵庫県五〇年史の構成の中で「結」の編には、先程の指摘に続き、まさに二〇一八年策定の『兵庫二〇三〇年の展望』の中に、「ひょうご五国」のあり方がきちんと収まっているのだ。それを抜き書きしてみよう。

「めざす姿「すこやか兵庫」の実現く五国を活かし 日本を先導 世界につなぐ」の項目の中に、「これからも五国の多様性を活かして、日本の未来を先導し、世界へつなぐ役割を果たしていかなければならない」「地域の個性と強みを活かし合い、ともに栄える五国をつくる」。

さらに二〇二二年に発表された『ひょうごビジョン二〇五〇』では、次のように「ひょうご五国」を前面に押し出している。「兵庫の強み」の項目には、「五国の個性」として、「兵庫は、気候風土、歴史文化の異なる摂津、播磨、但馬、丹波、淡路の旧五国が一つになった県です。今に息づく五国の個性が兵庫県の強みです。多様な地域が関わり合い、補完し合って発展してきた県だからこそ、これからも県内での活発な交流が新たな力を生み、兵庫に活力をもたらすでしょう」。

兵庫県の未来は、「起・承・転・結」の構成が示す過去・現在から「ひょうご五国」のあり方に投影されていく。確固たる未来イメージがそこに現れたといっても過言ではない。では「結」の編で、急速に「ひょうご五国」とのまとまりを得たように見えるが、時代構成の中に、その発展のあとをたどることができるのだ。それを次に記しておこう。

まずは「起」の編。一九七五年の『二一世紀への生活文化社会計画』の中で、無論過密過疎問題や環境汚

染問題等の解決を地域整備の基本的な課題とし、国の新全総のポイントはずさぬ上で、「兵庫県の各地域の持っている自然的、歴史的、社会的な特性と、県土と県民の多様な特色を生かした都市圏および広域生活圏の改造と創造を図っていくことが重要な課題である」と、国の三全総のフレームワークを兵庫県に先取りするかのような記述が見られる。「ひょうご五国」へ至るまさに「起」の発想といえよう。

次は「承」の編。一〇年後の一九八五年、『兵庫二〇〇一年計画』の中の「二二世紀兵庫への基本戦略」において次のような指摘がある。「極めて多彩な特性をもつ都市や農山漁村の個性に磨きをかけ、魅力を高めることによって、兵庫がわが国や世界の課題解決、その望ましい未来を切り拓く先導的な役割をはたすとともに、地域社会の発展を図るための条件と基盤を整える」。

まさに「承」の編にふさわしく、「起」の編での言いまわしを「多彩な特性をもつ」「個性に磨きをかけ」「地域社会の発展を図る」と言う表現に明らかにしたように、「起」の編での発想をさらに発展させている。

平時である限り、それを突破し変容させる契機にはなかなか出会わない。だからこそその引き続き二〇〇一年の「二二世紀兵庫長期ビジョン」は、次のように続く。「新しいビジョンづくりの視点」で「地域主義」をとりあげて、「広大で特色のある地域からなる県土構造を踏まえ、各地域が多様な特性を最大限に発揮するしくみづくりを進めながら、そのことによって兵庫全体の発展を図る」と言うのだ。兵庫県全体の県土構造から地域の特性を最大限に引き出すことによって、兵庫県もまた発展していくというダイナミクスが感じられる。平時であっても、「ひょうご五国」にやがて熟成される構想がようやく出てきたと言ってもよい。

そして「転」の編。歴史の転機は、国の歴史とはまったく無関係に兵庫県に、平成の大災害の中でも超ド

級の崩壊と破壊をもたらした。すなわち阪神・淡路大震災の勃発である。だから、「転」の編では、崩壊した県土をいかに創造的に復興させていくか、その課題への解答が、多分に情緒的な気分を催しながら、「ひょうご五国」への思いとして結実していく。大震災から一六年たち、東日本大震災をも経験した直後、二〇一年の『二〇四〇年への協働戦略』において、「兵庫の未来像―創造と共生の舞台・兵庫」が書かれた。

「それぞれの地域に根ざす多彩な歴史・文化や貴重な自然、厚みのある社会資本や企業群などさまざまな地域資源や、それらを生み出し、幾世代にわたって支えてきた多様な地域を兵庫のかけがえない財産として守り、次代へ継承していくとともに、人と人、人と地域、地域と地域をつなぎながら、最大限に生かしていく」。

災後と復興の気分の中で書かれたのであろう。兵庫県の各地域への思いがここにはためらうことなく表現されている。兵庫県にて生活すること、活動すること、それを具体化する人間像まで含めて、地域を見るまなざしは兵庫県の県土によりそう姿勢で書かれている。

二 「戦後」のダイナミズムと五〇年史との相関関係

以上の「ひょうご五国」のテーマで五〇年を見る時、「大きくつかむ」と同時に、やや前のめりになっていくことも感じられる。そこで次に「大きくつかむ」視点を、国の歴史発展との相関関係の下においてみてみよう。それはまず「十年一昔」という言葉から始まる。時代を切るのに、一〇年というのは分かりやすい。「たかが一〇年、されど一〇年」という言い方もあるではないか。この国では特に「戦後」という区分軸を

もちこむと、明快に「戦後」のダイナミズムが描かれることになる。そこで国の「戦後」を省みることに、兵庫県の「戦後」を省みることを重ねあわせて考えてみよう。

実はくり返しになるが、兵庫県五〇年史は「戦後」を始点とはしない。あくまでも正確に五〇年史に即していえば、一九六七年から二〇一八年までの五〇年である。もうすでに「戦後」が始まっているのだ、実は。そう、まさにそれは「戦後一〇年」を超えての「戦後二〇年」から、兵庫県五〇年史は幕をあけることになる。国レベルでは、「もはや戦後ではない」との余りにも有名なキャッチコピーを明らかにした「経済白書」が出たのは、「戦後一〇年」のすぐ翌年なのだ。国レベルでは「高度成長への助走」が始まっていた。かくて「戦後二〇年」は、戦後復興の達成と国際社会への復帰を象徴する「東京オリンピック」という祭りを終えた翌年に幕を開けた。五年前の安保騒動と政治の時代は後景に退き、岸信介政権をもって戦前型の感覚を思い起こさせる首相は姿を消した。吉田茂直系の池田勇人政権が「高度成長」を牽引しながら病気で退陣し、同じく直系の佐藤栄作政権がオリンピック後に成立したばかりであった。この時、「大阪万博」に象徴される高度成長による技術革新や国民生活の画期的向上という成長の明るさが前面に押し出されたのは言うまでもない。しかし同時に「公害」や「大学紛争」や「社会反乱」といった高度成長のひずみとも言うべき社会問題の深刻化が同時並行で起こることを、誰が予想しえたであろうか。

「戦後二〇年」には高度成長の果実とひずみがいつしよにやってきたのである。さて国の池田勇人、佐藤栄作という安定した官僚政権の登場と継続の反映とも言うべく、兵庫県政においても、金井元彦、坂井時忠という官僚出身者による安定した県政を保障するものとなった。「県史資料（地域情勢）」によれば、「高度経

済成長期からその終えんまでの間、兵庫県では、均衡ある発展に向けての地域行政体制の整備が進められた。県内では、一〇圏域において広域市町村圏の設定がなされたほか、県民局（六地域）と北摂整備局が設置された。また阪神丹波連携事業や自治振興助成事業の創設といった、地域間の連携や地域振興に向けた取組を後押しする政策が実施された。*「県史資料」…各執筆者が作成した担当分野の五〇年のまとめ

他方で「県史資料（地域振興）」にはこうある。

「高度経済成長期には、急激な開発や基盤整備が深刻な環境汚染を引き起こす中で、節度ある都市開発と緑豊かな環境保全との両立、ならびに過密過疎の同時解消が重要課題であった」。その中で、中国縦貫自動車道を「緑の回廊」と見立てた沿線開発が始まった。

さらに「県史資料（科学技術）」によれば、「国内で産業公害が報告された時期、兵庫県では、国の公害対策基本法に先駆け、「公害防止条例」を制定し、「公害研究所」を発足し、その対策を行った」ことが掲げられている。

以上の例示から分かるように、「戦後二〇年」では群発する「社会反乱」を含みつつも、国も兵庫も高度成長を軸に発展の道をたどった。さて「戦後三〇年」は、前年末、高度成長にさらにドライブをかけようと試みた田中角栄^{たなかかくえい}政権が、列島改造の失敗と金脈問題の顕在化で退陣した。しかし兵庫県は、高度成長のひずみを是正しつつ、前述したように、「起」をうけた「承」の時代にうまくスイッチしていた。「県史資料（地域情勢）」によれば、「全国的に生活環境重視の傾向が明確」になる中で、「県政基調も経済優先から生活文化重視へシフトすることとなり、新広域市町村圏や大都市周辺地域広域行政圏の設定をはじめとした広域事

業の進展や、ふるさと創生事業の展開がみられた」。

そしてハードな行政はもとより、市民生活、男女共同参画、文化、国際交流、観光といったソフトな領域や、子供、青少年分野、保健医療分野、果ては人々のくらしなど、あたかも「ゆりかごから墓場まで」のように多分野にわたる行政のあり方が問われる時代に、「戦後三〇年」から「戦後四〇年」へとバトンタッチされていく。国の「戦後四〇年」は、長期にわたる中曾根康弘政権の下で、「戦後政治の総決算」とのキャッチフレーズ通り、「国鉄等民営化」に成果をあげ、対外経済政策でも、一九八五年後半のプラザ合意で円切り上げが行われた。「戦後四〇年」を兵庫県政は、貝原俊民知事（一九八二年～）の下で迎える。日本の工業化を牽引してきた兵庫の重厚長大産業は、円高でとりわけ大きな打撃をうけた。企業の懸命な努力もさることながら、兵庫県は特定不況地域振興条例を制定し、さらに時代を先取りした科学技術立県を目指した。これらの取組こそが、後のSpring-8やスーパーコンピュータ「京」「富岳」の誘致にもつながり、兵庫の大きな財産となった。こうした努力を重ねつつ兵庫県政は「承」の時代を続けていく。

そこに「戦後五〇年」。国もそうだが、それ以上の変革勃発のため、兵庫県はまさに「転」の時代になることを余儀なくされた。「戦後五〇年」の到来の二年前以来、国では大変革の嵐が吹き始めていた。すなわち自民党が下野し、非自民連立政権が誕生し、「戦後一〇年」以来四〇年以上続いた「五五年体制」にピリオドが打たれた。もっとも「政権交代」はさらなる「政権交代」を生み、「戦後五〇年」は、自民、社会、さきがけ三党連立政権の下、社会党出身の村山富市首相むらやまとみいちによって担われた。しかしまさにこの時、あたかも自社さ連立政権の危機管理能力を試すかのように、そう「戦後」の意味を根底から問い直す事態が、この年

初めに生じたのである。何をかくそう、他ならぬ兵庫県に生じた阪神・淡路大震災と東京都に生じた地下鉄サリン事件である。「戦後五〇年」、長く続いた平和の中であって、自然災害と人災とが一挙に訪れ、国の危機管理能力が鋭く問われたのであった。

よそごと、ひとごとではない。兵庫県五〇年史は、まさに「戦後五〇年」で、阪神・淡路大震災のインパクトをもろに受け、国とはその復興のあり方をめぐって対峙することになった。他の地方史とも異なり、「転」の編は、兵庫独自の緊迫した歩みを記すものとなった。「県史資料（防災分野）」によれば、「戦後二〇年」以降全国の犠牲者数は「高度経済成長時代を迎えて防災力が大きくなった」と考えても不思議ではなかった。科学技術の発達は必ずや自然災害の被害を縮小していくという、安心感をこの国に与えつつあった。だから「我が国が平成二年から始まった国連の国際防災の一〇年（I D N D R）の提示国になったのは、防災大国になったという錯覚があったことも一因である」と「県史資料（防災分野）」にはある。「ところが、阪神・淡路大震災が起こり、我が国の大都市では災害脆弱性が大きいことが明らかになった」「この大震災に直面した兵庫県は、災害に対処する指揮命令系統を刷新するとともに、被災一〇市一〇町と一丸となって、復旧・復興事業を推進した。その過程で、「創造的復興」を目指す革新的な政策を採用して、これが平成十七年に神戸で開催された第二回国連防災世界会議で採択された兵庫行動枠組（H F A）の基本となった。このような県の防災政策は、地方分権を具体的に推進する機関として、平成二十二年に関西広域連合を誕生させた」。ここでは「転」の編からさらに「結」の編までを展望していることが分かる。

復興に限定するならば、次の記載（「県史資料（復興）」は国の「戦後五〇年」から「戦後六〇年」までに

びたり重なる兵庫県の「転」の編を紡いで過不足ない。

「阪神・淡路大震災からの復興の取組は、被災自治体が主体となり創造的復興をキーワードに迅速に進められる。被災者の生活再建が大きな課題となり、復興基金等を利用し様々な支援が行われた」「震災から五年で応急仮設住宅は解消されるが、公営住宅での生活支援が新たな課題となり、様々な被災者支援の取組が続けられる。また商店街・地場産業の復興も課題となり、まちのにぎわいづくりの取組も行われる」

さらに阪神・淡路大震災からの復興では、いわゆる「後藤田ドクトリン」の影響が大きかった。法体系の整合性から言えば公費を私財再建には投入できないとの「行政の壁」に対して、個人の生活再建をこそ最重要視すべしという兵庫県の主張は、二五〇〇万人の署名や全国知事会の賛同を得て、震災から三年後に議員立法による「被災者生活再建支援法」の制定に結実した。

また県内外からの一三七万人（平成七年）に上るボランティアの活躍は、官のみならず民もまたパブリックを支えるという新たな状況を生み出し、これまた三年後の「特定非営利活動促進法」（NPO法）の制定を得て、その後の日本社会のあり方を方向づけることとなった。

さらに、兵庫県が目指した創造的復興の具体的成果をあげておこう。

それは、神戸東部新都心（HAT神戸）における国際防災・人道支援拠点の形成、次いで、埋立てのための土取り跡を美しい公園と異文化の交わる国際会議場とに変えた淡路島の夢舞台、そして心豊かな生活の拠点となった西宮の芸術文化センター、など多くの資産として残された。

ところで「国」レベルでの「戦後六〇年」は、震災復興一〇年を節目とする「兵庫」の「戦後六〇年」と

は、趣を異にしていた。すなわち小泉純一郎こいずみじゅんいちろう首相の郵政解散と勝利に尽きる。人間ならば「還曆」。その祝いとともに来し方を振り返るところだが、小泉首相はそんな悠長なことを言っではいられなかった。五年余り続いた小泉内閣の総仕上げといつてよい自民党をぶっ壊す姿が明確に現れた。調整のための党内作法にかまわず、説得も妥協もしない。かくて劇場型の小泉政治は、「国」レベルの政治や政治家のあり方を変えた。小泉政治の後は、途中に「政権交代」を挟んで、自民党三人、民主党三人の一年一代の首相が次々に現れる前代未聞の事態を招くこととなった。

「創造的復興」をうたう兵庫県は、貝原県政から井戸県政へと、着々と「災後」の時代を歩んでいった。しかし「六〇年」以上続く「戦後の果て」（二〇一一年）に、東日本大震災が起こった。三・一一の空前の自然災害によって、いよいよ「戦後」から「災後」への時代転換の方向性を示したかにみえる。兵庫県の復興の政治と行政は、当然に東日本大震災の復興の先駆者としてモデルとなったことは言うまでもない。

日本列島は地震災害そして自然災害を、もろにかぶるようになった。東日本大震災からわずかに五年、「戦後七〇年」の翌年、熊本震災が勃発した。「戦後五〇年」から「戦後七〇年」をこえてのこれらの地震災害の勃発は、平成が自然災害再来の時代たることを国民に体得せしめた。熊本地震に際して、早々とまとめられた「創造的復興へ向けて（緊急提言）」の骨子には、はっきりと「我々は、今、阪神・淡路大震災後の時代を生きている」と書かれている。そして「新潟県中越地震を経て、東日本大震災から五年後、熊本地震が起こった。南海トラフ地震も含め、今後も大きな地震が、いつどこで起きても不思議ではない時代であること」を改めて認識しなければならない」との見識を示す。すなわち、「戦後五〇年」から「戦後六〇年」にかけ

て兵庫県だけが負った「震災と復興」のテーマは、「戦後六〇年」から「戦後七〇年」にかけて、全国化していく。

「災後」の常態化の認識に立って、復興計画は進められていくことになる。ただし兵庫県五〇年史には、「転」の編から「結」の編にかけて復興のあり方が、淡々と書かれている。兵庫県史の「転」の編から「結」の編は、「災後」の競争化という視点で捉えることもできる。復興の先例が、時間軸にそって「戦後六〇年」から「戦後七〇年」をこえて現れるわけだから、「災後」モデルも多様化し、「災後選択の時代」になったとも言えよう。

長い安倍晋三あべしんぞう政権そして菅義偉すがよしひで・岸田文雄きしだふみお政権と来て、やがて一年後には「戦後八〇年」がやってくる。「ひょうご五国」の発想はさらに深められていくのであろうか。「戦後」の一〇年ごとのダイナミズムの中に、「戦後一〇〇年」にむけての何かが問われることになるのであろうか。どうやら「起・承・転・結」の四部構成で、「兵庫県五〇年史」は完結にむかっているやに見える。いや、そうではないであろう。現在の兵庫県のあり方に、「結」の編から、新たな「起」の編が立ち上がろうとしているかにみえる。未来への兵庫県のあり方に思いを寄せつつ、五〇年史を大きくつかむ読み方を示した。

さて読者諸姉には、自分自身で歴史を大きくつかむことを試みてほしい。

令和六年三月

兵庫県史編集会議座長 御厨 貴

